

2013 年度 聖路加看護大学大学院博士論文要旨

聖路加看護大学大学院看護学研究科
博士後期課程 看護社会学専攻 亀井 緑

論文題目

原子力事故により避難している高齢者の生活再建プロセスの理論化—津波により避難している高齢者との縦断的調査による比較—

目的

本研究の目的は、高齢原子力避難者が、避難生活でどのようなことを体験し、どのようなことを思い生活しているのかを記述し、生活再建を理論化することである。

方法

本研究は、グラウンデッドセオリーアプローチによる質的記述的研究である。研究対象者は、東日本大震災による福島第一原子力発電事故により 2011 年 3 月 12 日に避難指示が出され、避難生活を余儀なくされている福島第一原子力発電所から半径 20 km 圏内に住む 65 歳以上の住民 11 名と、津波により自宅を流失し避難生活を送っている 65 歳以上の住民 9 名である。データ収集期間は 2012 年 9 月～2013 年 3 月で、半年毎に半構成的インタビューを実施した。本研究は、聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て遂行した(承認番号:12-042)。

結果

震災 1 年半後の高齢原子力避難者の思いから見た生活再建は、コアカテゴリ《原子力事故への帰還困難のあきらめの中で揺れ動く》、主要カテゴリ【原子力事故への怒りが持続する】、【望郷の念と現実に葛藤を生じる】、【言いようのない不安が湧きあがる】、【自分自身を鼓舞する】、【人と人とのつながりをつくる】が抽出された。震災 2 年後では、コアカテゴリ《希望の持てない現実の中で前に進みたい気持ちと諦めが混在する》、主要カテゴリ【原子力事故への不信感がある】、【帰還への諦めを感じる】、【問題が顕在化し苦悩する】、【これから先の住みかに希望をつなぐ】、【人と人とのつながりをつくる】が抽出された。震災 1 年半後から 2 年の半年間で高齢原子力避難者の思いは、原子力事故への怒りから不信感へ、帰還への葛藤から諦めへ、言いのない不安が湧きあがる状況から問題が顕在化し苦悩することへ、自分を鼓舞する状況からこれから先の住みかに希望をつなぐへ、人と人とのつながりをつくるでは、自己中心の視点から他者との関わりの視点へと変化し、地域社会を再結成しようと努力する思いへと変容した。高齢避難者の戦争体験は避難生活を生きる強みとなり、人と人とのつながりを持つことが、生活再建の原動力になると考察できた。

結論

本研究の結果から高齢原子力避難者の生活再建は、原子力事故への怒り、避難生活の幻滅、問題解決・適応、社会の再結成の 4 つのプロセスが明らかとなった。そして、その背景には、原子力避難者としての肩書き(スティグマ)を背負いながら生きていくことと、生活の決定権は子供にあり子供に従う生活であるという高齢者の特徴が存在した。本震災の特徴は原子力事故が日本で初めての出来事であり、世間から注目されることや避難先での風評の流布による苦悩が存在したことであった。高齢原子力避難者の生活再建における課題を抽出し、高齢避難者の支援策への示唆を論じた。